

# 寛政二年庚戌の『南畝集』について

——大田南畝における白詩受容——

池澤一郎

## はじめに

文学には流行というものがある。ひとつの理念や主張に裏づけられたものである場合もあろうし、特にこれといった背景を持たぬ場合もあろうが、いずれにせよ、ある作風なり、詩風なりが、一世を風靡することがある。

ただ作家がひとつの流行に相対した時にいかなる態度を示すかは、様々な個人差があるだろう。流行の実態を見窺めることもせずに軽々しくそれに追隨する者もあれば、自己の既成の価値観に固執するあまり、流行には一顧だに与えない者もあろうか。また一箇の流行なり、文芸思潮なりを形成している個々の作家について見ても、軽薄な追隨派もあれば重厚な懷疑派もあり、狂躁的な信奉者もいれば、他の文芸思潮にも寛容であらんとする客観的な者もいるはずだ。

天明寛政の交に、江戸漢詩壇においては、後の化政期に最も支配的になって行くいわゆる宋詩風が唱道されだす。これは一歩先

んじて上方の混沌社などの詩社が、それまで支配的であった蕨園格調派の詩風に対する反省に立って「晴雨、寒暄、人事曲折、写実を主と為す」(春水遺稿) 卷十一「書詠史詩後」より写実的な詩風を提唱していたのが江戸にもたらされたものだが、山本北山は天明三年(一七八三)に『作詩志骸』を著わし、既に強弩の末の観を呈していた蕨園擬唐詩風を完膚なきまでに批判する。北山が蕨園詩のかわりにもちあげた清新性靈派の詩論は明末の袁宏道に由来するが、それは蕨園詩論が排他的に価値を置く李白・杜甫を代表とする盛唐の詩風以外の、殊に宋代の詩風とその前驅をなす中晩唐の詩風に拠り所を求めたものである。こうした北山の詩説を受けて、中晩唐や宋代の詩に範を取って精力的に詩を作り、いわゆる宋詩風というひとつの流行を形成するのに与って力のあったのが、市河寛政を盟主とする大窪詩仏・柏木如亭ら江湖詩社の詩人たちであったことは周知の通りである。江湖詩社が開かれたのは、天明七年(一七八七)であるが、積極的に写実的な宋詩風の詩を寛斎が作るようになるのは、寛斎が寛政異学の禁に触れ、

月俸半減の処分を受け、聖堂教授を辞した寛政二年（一七九〇）以降のことである。

天明寛政の交のこうした文学史的状况に對して、大田南畝というひとりの詩人はいかなる反応を示したか。南畝は門人の鈴木猶人に「彩毫は□宋元の陋無く、白雪は王李（中国明代の古文辞学の中心的提唱者王世貞と李攀龍）に寒かず」と評されたように、盛唐を持ちあげ、中晩唐や宋代の詩風に価値を認めぬ護園古文辞学派の流れを汲む詩人である。漢学の師松崎觀海は太宰春台の高弟であるし、先輩詩人として仰いだ宮瀬龍門や僧書山も服部南郭の弟子筋にあたるのだから、その詩集『南畝集』の大半が護園擬唐詩的な作によって占められているのは異とするに足りない。ただ、南畝が青春の日々を謳歌した明和・安永・天明といった時期は右に見たように、まずは経学の側面で、続いて詩学の側面においてすでに強弩の末の趣きがあった徂徠学に反旗をひるがえす人々が簇出した時期でもあったのである。徂徠学がこの時期形骸化しつつあったからこそ、体裁から内容まで古文辞学のパロディという性格が色濃い『寢惚先生文集』（明和四年刊）が洛陽の紙価を高からしめたものでもあった。とすれば、護園の学が葬り去られようとした時期に頑なに護園風の擬唐詩を作り続けた南畝の姿勢はやはり異とするに足りるだろうが、今そのことには深入りしない。本稿は大田南畝という護園末流の詩人が、天明寛政の交に勃興する中晩唐や宋代の詩を範とする詩風にどのような態度をもって対処したか、あるいはそうしたひとつの流行形成にどのような姿勢で関ったかを明らかにしようとするものである。その際問題意識を

拡散させないために、対象を寛政二年庚戌の『南畝集』の唐土の詩人たちとの唱和詩群、殊に白楽天の詩との和詩にしばらく思う。

## 一

南畝の明和八年（一七七二）から文政五年（一八二二）までの約五十年間に亘る漢詩、全四千七十九首<sup>(2)</sup>を収める『南畝集』を読み進めて行くと、卷八寛政二年（一七九〇）の詩稿に至って、それまでには見られぬ特異な現象を指摘しうる。この年が元旦詩で始められるのは例年通りだが、後続する五首の詩は、明の李夢陽、宋の蘇軾、中唐の白居易の韻に和する詩なのである。そしてこの現象は正月のみに留らず、年間を通じて唐宋元明と様々な中国詩人との和詩を南畝は賦している。それらの詩題を岩波版全集において冠せられた通し番号とともに列挙すれば次の通りである。

- 1572 上元集芙蓉館和李獻吉元夕宴王孫第詩韻
- 1573 同前和東坡韻（三首）
- 1576 和白樂天与諸客携酒尋去年梅花有感詩韻
- 和宋強幾望墨壺
- 1582 和宋呂晦叔櫻木
- 1583 和唐李益竹窓聞風詩韻
- 1585 花時遍遊諸園次陸放翁韻（二首）
- 1600 芙蓉館席上和白樂天酹松竹
- 1619 和白樂天同友人尋澗花
- 1620 和宋張天覺讀書燈
- 1621 和清蕭揆三溪橋候月韻
- 1631

1632 1633 1634 1635 1647 1650 1696

故衣次清湯建三韻

釣者次宋徐仲車韻

和白樂天栽杉韻

和陸放翁午睡至暮韻

林間石和林和靖

杖頭錢和清張歷友韻

遥題尾陽靈岳院天滿宮和元薛天錫韻

知友との唱和詩は『南畝集』の中に多く見られるのだが、中国詩人の作と年間に二十一首も唱和するのはこの寛政二年のみである。さらに注目すべきは、蕺園詩論では排する中唐の詩人白居易や李益、宋の詩人陸放翁や林和靖らの作と唱和するものが目立って多いことである。後述するが、唱和詩というものは和することこの原詩に深く学ぶ姿勢なくしてはなしえない。現に南畝は寛政二年以降の『南畝集』に明らかに 中晚唐詩や宋詩に学んだ跡を窺わせる作を残している。一例を引く。

村落蕭然 太古風 驚人野雀入幽叢

誰来「見梅千樹」 不是林逋「必放翁」

(2707「正月初五蒲田探梅同吉但教賦六首」其三・『南畝集』十三・享和三年)

結句で波線を付した「林逋」「放翁」はいずれも宋代の詩人である。前者林和靖は鶴と梅とともに隠棲した故事で有名なのである。後者陸游には「何ぞ方に身を千億に化して一樹の梅前一放翁たるべけん」という一聯を含み持つ「梅花絶句六首」(其三)があ

る。南畝は探梅詩の中に梅に因縁の深い両者をとりこんだのである。<sup>(3)</sup>

また第三者からの評言を見ると、南畝がこの寛政二年の試みの後、中晚唐や宋の詩風を獲得して行ったことが分るのである。

○放翁に似たり。(3585「春雪驚谷小集」・『南畝集』十八・文化九年・欄外の菊池五山評)

○知んぬ君の詩格の香山(『白居易』)に似たるを。

(3670「覺和仁正侯瑤韻」同右・附録擅春斎の「再欲原韻和蜀山人遊村莊之作」の結句)

○中晚(『中唐晚唐』)の妙境なり。

(3754「雲林庵」と同・右文化十年・欄外の菊池五山評)

これらの評言が正鵠を射ているとすれば、南畝の寛政二年の特異な試みはその詩風に変化をもたらしほどの、南畝の詩歴を考える上で無視できない意義をもつものであったといえる。

冒頭に述べたように寛政二年という年は天明寛政の交の江戸漢詩壇における宋詩風勃興の時期に重なる。そうした宋詩風勃興の氣運に便乗する形で、南畝の寛政二年の試みがなされたか否か。信奉するはずの蕺園詩論を裏切ってまで、白居易や陸游に学ぼうとしたのはなぜなのか。そうした問題に答えるためにも、われわれはまず寛政二年庚戌の『南畝集』を繙き、その唱和詩を吟味して

かからなくてはならない。

## 二

全三十一首の唐土の詩人との唱和詩の中で最も多いのが、白居

易との四首である。そのうち二首（詩題番号169と194）の原詩「翫松竹」と「栽杉」とは一種の詠物詩であるから、詩人の感慨のようなものを窺いにくいので今は扱わない。残った二首を見ることにする。ここでは白氏の原詩題を最初に掲げ、次に上に白氏の原詩を、下に南畝の和詩を私に訓点を付して対照しやすい形で紹介しよう。

与諸客携酒尋去年梅花有感

- 1 馬上同携今日盃
  - 2 湖邊共覓去春梅
  - 3 年々只是人空老
  - 4 处处何曾花不開
  - 5 詩思又牽吟詠発
  - 6 酒酣閑喚管弦来
  - 7 樽前百事皆依旧
  - 8 点檢唯無薛秀才
- 
- 今年花引去年盃  
馬上酒求湖上梅  
盃酒平生行处挈  
梅花無數到時開  
幽吟一路縁君熟  
獨立三春待我来  
却月凌風千載後  
何人更繼水曹才

和詩の特徴は原詩で用いられている韻字を全て使いつつ、原詩に詠み込まれたテーマに賛同の意を呈しながら、なおかつ和詩制作者の独自性を打ち出すことにあると言ったらよからうか。南畝の和詩は作法通り、原詩の韻字（◎）を付したものの・上平十灰韻）を全て使用し、「探梅」「乘馬」「飲酒」「無常感」「吟詩」といった原詩を織りなす要素を自詩に摂取している。ただ「管弦」の要素は原詩にはあって、南畝の和詩にはない。また、原詩では3・4句に

有名な「年年歳歳花相似 歳歳年年人不同」（劉庭芝「代悲白頭翁」）を底に効かせた辞句を連ねて無常感を表出させた後、7・8句においても、酒宴の諸事万般は昔通りだが、旧友がひとり座に居合せていないことを賦して重ねて無常感をにじませる。南畝はこれを贅疣と判断したのか、無常感は7・8句に集中して表現している。南畝の和詩の独自性は、まずこの尾聯に關って指摘しうるものである。

南畝和詩の第8句「水曹の才」とは、水部郎という官職についた中国いにしえの吏人の詩文の才を言おう。宋の蘇軾にも「詩人例として水曹の郎と作る」（「初めて黃州に到る」という詩句がある。水部郎となった詩人の例は梁の何遜や唐の張籍などが著名であるが、南畝和詩の「水曹」は何遜のことと断じてよろしい。何となればすなわち、何遜には「早梅を詠ず」（「初學記」卷二十八所収）という詩があり、その一聯「枝は横はる却月の観 花は遶る凌風台」は南畝和詩の第7句に換骨奪胎して使われているからである。南畝がこの尾聯において何遜の故事を採用したのは探梅という詩の背景に合致するからであるが、あとひとつ見逃せぬ理由が潜在する。

原詩和詩双方の首聯において、馬上酒を携え、湖邊の梅を探るという設定がなされているが、これは明らかに晋の山簡の故事をふまえたものである。『晋書』列伝十三・「世説新語」任誕篇に見える故事であるが、より簡便な『蒙求』にも「山簡倒載」の標題のもとに同内容の記事を引く。そこには「簡出づる毎に多く池の上に之き、置酒して輒ち醉ふ。」だとか「時時能く馬に騎り、倒

に白接離を著く。」などといった記述が見えるのだ。山簡の故事には「探梅」の要素はこれを欠くが、南畝はそれを何遜のものとして転じて自詩の末尾にとりこんだのだ。これには理由がある。『杜律集解』（五言律集解）巻二の「北隣」という詩の頸聯が、

酒を愛す晋の山簡、

詩を能くす何水曹、

というものであることが想起されるべきなのだ。南畝は白詩が冒頭に山簡の故事を下敷とするのを見抜くや、おのが詩囊に貯えられていた杜律の一聯を介して、ごく自然な発想として何遜の「詠早梅」詩の内容を拉し来ったのであった。『南畝文庫蔵書目録』中に「杜律集解 六本」という記載が備わるのは言い添えるまでもない。

南畝和詩の原詩にはない独自性がいまひとつ存する。白詩において盃を携え来ったのは馬上の人であり、湖辺に去年と同じ梅花を採すのもまた同じ人であると読める。南畝はそれを転じて、去年酌み交した盃を招き寄せたのは、今年咲いた花だとし、湖上の梅を採すのも人ではなくて、馬上の酒であるとする擬人法を導入している。やや技巧に走り過ぎた嫌いのあるこの趣向は期せずして、南畝の世界観を窺わしめるものとなっている。

かくばかり めでたく見ゆる世の中を

うらやましくやのぞく月影

（『万載狂歌集』巻五秋歌下）

この南畝の狂歌は『拾遺集』巻八藤原高光の左歌を本歌とする。かくばかり 経がたく見ゆる世の中に

うらやましくもずめる月かな

南畝は本歌の「憂き」世を「浮き」世に転じている。江戸の現実を謳歌しているのだ。本歌において作者は生きがたい現世をはかなみつつ、中空に超然として澄んだ光を放つ月に憧憬のまなざしを注ぐ。かたや南畝狂歌にあっては、かえって月が「めでた」い人間世界を覗きこむのである。この狂歌の構図は、白居易がいささかの感傷を胸に、こぞの梅を探し求めるといった原詩の趣向を、南畝が少くとも首聯においては感傷を排して浮き世に酔い痴れる心境を「花」が「盃」を引き、「酒」が「梅」を求めると転換することで詠出しようとしたのと軌を一にするだろう。こうした南畝の機知のひらめきを「和習」として非難するか、江戸漢詩の醍醐味として認めるかはもとより鑑賞者の自由に委ねられている。

が、右の和詩では発想や趣向の点でいささか南畝の手腕が示されているにせよ、ポエジーの表出という点では原詩が振わないこともあつてか、少々物足りない憾みがのこる。

詩としての結晶度という点では次の一組のほうが原詩和詩ともにすぐれるだろう。

同友人一尋潤花、

- 1 聞<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>潤底花<sup>一</sup>
  - 2 貫<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>村中酒<sup>一</sup>
  - 3 与<sup>レ</sup>君来<sup>二</sup>校遲<sup>一</sup>
  - 4 已<sup>レ</sup>逢<sup>二</sup>揺落後<sup>一</sup>
  - 5 臨<sup>レ</sup>觴有<sup>二</sup>遺恨<sup>一</sup>
- 欲<sup>レ</sup>看<sup>二</sup>幽潤花<sup>一</sup>  
聊<sup>レ</sup>携<sup>二</sup>一樽酒<sup>一</sup>  
樽酒雖<sup>レ</sup>云<sup>二</sup>滿<sup>一</sup>  
已<sup>レ</sup>是<sup>二</sup>落花後<sup>一</sup>  
譬<sup>レ</sup>如<sup>二</sup>武陵人<sup>一</sup>

6 恨望空三溪口、  
 7 記取花発時、  
 8 期君重携手、  
 9 我生日日老、  
 10 春色年年有、  
 11 且作来歲期、  
 12 不知身健否、  
 重、来、桃源口、  
 低回、不能去、  
 惆悵、將、分、手、  
 三春難、共期、  
 百歲復、何有、  
 借問、世中人、  
 亦同、此心否、

韻字は「酒」「後」「口」「手」「有」「否」の上声廿五有韻である。先の七言詩に対して、今度は五言詩である。表現や発想を転じつつも原詩と同内容のテーマを盛りこむのが和すという詩作法に要請されることを鑑みた場合、一聯十字の中ですでに韻字一字の位置と中身が定められているということは、少々窮屈な制約と言える。南畝の詩人としての力量はここで問われる。

この詩、先の七言詩ほど奇矯な趣向はこらされていない。和詩としては原詩により忠実である。が、先の詩では暗い色調を明色に転じる傾きさえあったのに比して、この詩は暗色の無常感をいっそう行き場のないものとしてはいまいか。白氏が今年の花が散ったのを恨みつつも、早くも来年の看花を友と約して気持ち切り換えるのに反して、南畝は花の散った跡に立ち去りがてに低回し、悲しい気分のままに友と別れるのである（7・8句）。いずれにせよ、無常感を基調底音として、看花・飲酒・友情といった文様を織りなす白詩に和して、南畝はよく交響楽を奏でていると評せよう。それが集約的に窺われるのが5・6句である。ここには陶淵明の「桃花源記」（「蒙求」中巻「武陵桃源」）の内容がふまえられている。

つまり、白氏が友人とともに溪谷にはころぶ桃花を看着酒を酌もうと心待ちにしていたのに、友の来訪が遅れ、花が散り尽してしまったことを恨みながら、酒を酌みつつ川の流れを眺めていると詠むのを、南畝は十全に受けとめて、その悔いても回らぬ嘆きを桃花源を再訪せんとして果せなかった漁夫の嘆きにオーバーラップさせているのだ。さらにこの故事の使用が適切なのは、白居易その人が「陶潜の体に效う詩」や「陶公の旧宅を訪う」等の詩を賦したことに窺える通り「桃花源記」の作者淵明にひとかたならぬ傾倒を示した詩人であったからである。

### 三

前節では白氏の作に和してなった南畝漢詩を原詩と比較対照しながら瞥見したが、南畝が白詩に学ぶ姿勢は、それを換骨奪胎するにせよ、決して浅薄なものとはいえない。問題はこうして南畝がこのような試みをあえてしたかということである。白居易は中唐詩人であり、護國詩論では度外視される存在である。末流とはいえども、『寝惚先生文集』のパロディを例外として、ほぼ忠実な護國学徒であった南畝が、『南畝集』について見る限り、それまで和することなど一度もなかった白居易の詩に、なぜ寛政二年に至って和したのか。以下数条に亘ってその理由を考えてみよう。第一の理由を考えるには、南畝が奉じたはずの護國詩論をもう一度見直すべきであろう。

古詩は漢魏を以て至れりと為し、近体は開天を以て至れりと為す。是れ自から風氣の会する所にして、其の人と雖も自ら

其の然るを知らず。降りて六朝、而して中晩は愈々工みにして愈々失へり。

〔徂徠集〕卷十九「題詩學三種合刻首」・原漢文〕

こうした徂徠の論は確かに明の李攀龍・王世貞の説を受けて、盛唐詩を近体詩の最高峰と見なし、中晩唐は格調を失ったとして取らないとしていることである。徂徠の詩文の面の後継者服部南郭は享保九年（一七二四）に『唐詩選』を校訂上梓したが、この撰集が中唐の白居易や晩唐の杜牧の詩を一首も載せない偏向せるものであることはよく知られている。校訂者南郭は一見師説に忠実であるかのごとくである。

漢魏六朝及び唐風の盛んなる、下りて其の季はこれ萎え、宋元はこれますます枯れ、明人の旋や復た振起するに与るに至りて、千古を商榷し、紛乎として論ずること易からざらんや。

〔南郭先生文集〕三編卷五「江陵集序」

右の文中の「其の季」を中晩唐を含蓄すると読めば、徂徠の説と大差はない。がこういった時代区分に基く図式的論義には必ずや例外といったものが存するだらう。まして相手はイデオロギーならぬ文学である。そもそも、初・盛・中・晩といった唐の時代区分は後世文学史家（明の高棟『唐詩品彙』）のさかしらであって、それをもって全てを裁断しうるはずもなく、詩の流れは脈々と続いていたのである。案の定、南郭には次の文言があった。

白樂天ノ詩ノアシキコト、誰モ云コトナレドモ、長恨歌ナドノ如キ、古事ヲ用ヒテ上ヘアラハサズ、ヨク明白ニシテ、シカモ情ヲ失ズニ作レルハ、千秋ノ絶伎、元瑞モホメタリ。小

督詞樂天ニ擬シテ見テ、初テ樂天ノ及ガタキコトヲ知りタリ。

白樂天ノ詩至テ上手ナリ。一変シテ一流ノ詩ヲツクレリ。樂府ナドノ事情ヲ云タル処類稀ナリ。長恨歌ヲ傑作トスルモ、フマヘアルコトヲ、古事古語ノ上ヘアラハサズ作レリ。

右の湯淺常山が『文会雜記』中に書き留めた南郭の言辭は、白詩を一首も収めぬ『唐詩選』が広く世に行われるにつれて普及した「白俗」の汚名を白居易の名譽のために南郭自身が雪ぐような趣きすらもつ。さすが護園の詩宗といわれる南郭は、世評に惑わされずに白詩の眞価を見抜くだけの炯眼をそなえていたのである。南郭没後に人となった南畝は、常々先輩詩人であり南郭の聲咳に接していた僧耆山に生前の南郭の風采を語り聞かされ、尋常ならざる敬慕の念をいだいていた。そうした南畝が南郭同様白詩の見るべきところを見て唱和詩を制作したのに何の不思議もないのである。南畝に南郭に通底するような白詩評價があったことは、例えば寛政二年に先立つこと六年の天明四年に次の一聯を含む七律「西原に牡丹を見て、伴忠順に寄す」が存することによっても知られる（『南畝集』六）。

借問す豪奢の諸子弟

寧んぞ元白に詩情あるを知らん

「元白」は言うまでもなく、元稹と白居易を指す。白居易には「西明寺の牡丹花、時に元九を憶う」詩の他、牡丹を詠じた詩が少くない。かたや元稹にも白氏に唱和した「和樂天秋題牡丹」を始め、三首の牡丹詠を『元氏長慶集』の詩題に確認できる。南畝

は元白が牡丹をよく詩に詠じることを意識して、それを巧みに己が詩のフレーズに取り入れたのである。同時に右の一聯からは、当時の貴族の子弟の間に元白を軽視する風潮が瀾漫していたことも暗に窺われる。これは護國詩論が一世を風靡し、白詩を一首も収めない『唐詩選』が広く世に行われる一方で、「元輕白俗」なる標語が、喧伝された結果もたらされた風潮であったといえる。

『朱子語類』卷一四<sup>(9)</sup>にある白氏が詩をなすことに老嫗に解しうるか否かを尋ねてから集に録したという逸聞に拠りつつ、朱子学を信奉する道学先生が火付け役となったものと覚しい。これより後、寛政十二年（一八〇〇）に「読白氏長慶集二首」を賦して、白詩への思慕の情を披瀝した尾藤二洲に古賀精里が噛み付き、調停役としての柴野栗山をも交えてのいわゆる学白論争が三博士の間で戦わされた際も、白氏をこきおろす精里の論拠となったのは『朱子語類』のエピソードであつたろう。この学白論争は、先述した江湖詩社の文学運動のうち、寛政三年（一七九一）以降毎年八月に催された白居易を祭る集りである香山社等の白詩鼓吹の活動が奏効し、寛政末年に至っては、民間に白氏推重の風が行き亘り無視しえぬ勢力をもったことを背景とする。当の仕掛人である江湖詩社の盟主市河寛斎がもと昌平黉の教官で、寛政の改革政治と軋轢を来して野に下った人であつてみれば、三博士中リゴリストをもつて鳴る精里が「白俗」推重の風を嫌惡し、白詩に入れあげる二洲に諫言したのも当然のことであつた。しかしながら、この「元輕白俗」なる語は、もともと朱子も先輩詩人として尊崇した宋の蘇軾の青年客気の裁断の文（『祭柳子玉文』）の一節に由来す

るものであり、圭角多かつた蘇軾は各地に左遷される憂目にあつてからは、むしろ白氏に傾倒しており、よく知られた号「東坡」は白詩の「東坡種花二首」や「步東坡」といった詩に基くものとまで言われるのだ。<sup>(10)</sup> いずれにせよ、南畝は「白俗」なる標語にまどわされることなく、「詩情」が存するのであれば「元白」の詩であろうと評価するにやぶさかではなかつた。それは南郭の白詩認識と通底するのである。

第二の理由として、白居易が中国詩史上、和詩という詩体の確立者であつたことを忘れるべきではない。人口に膾炙した「三五夜中新月の色 二千里外故人の心」の対句を含みもつ、「八月十五日之夜、禁中に独り直し、月に對して元九を憶う」を想起するまでもなく、その類稀な友情をもつて伝えられる元稹こそは白氏の最高の唱和の相手であつた。『元白繼和集』についてその見事な報酬のさまを跡づけることは控え、平岡武夫氏の『白居易』に譲らせていただきたい。白居易・元稹によつて確立された和詩という詩形式は、より正確にいえば、南畝の詩がそうであつたように相手の詩中で用いられた韻字をそっくりそのまま自詩で使う次韻の酬和という形式である。南畝が唐土の先賢の詩に集中的に和するのは寛政二年の詩稿以外にはないことだが、それ以前も以後も多く知友の作に和している。「和答書公見寄」（安永四年）、「遙和彦嶺電草廬吹火竹筒韻」（安永五年）、「和古賀齋普卿見寄」（文化十三年）、「和鎌孫雪詩」（文政三年）といった具合で枚挙に遑がない。かく自在に和詩をものする南畝が、その確立者たる白居易の詩に和すということは、いつかはなされなくてはならぬことであ



った。

第三の理由を考える前に、われわれはまず市河寛斎が自己の詩歴をふりかえりつづなした次の文言に耳を傾けるべきである。

予の七言小詩におけるや、初め李濟南（『攀龍』）に刻意し、傍ら李北地（『夢陽』）王呉郡（『世貞』）に及ぶ。久しうして自ずから千篇一格、陳々として味無きを覚え、時に格を破りて明末を為さんと欲するも、旧習の鋼する所、竟に超然たること能わず。昌平辭職の後、閑居悶々として香山集を讀過し、温厚和平の旨において稍や自ら悟ること有り。また晚唐諸子の纖巧を愛し、時に樊川・義山に出入し、又降りて宋を為す。

（原漢文）

右の寛政二年十二月の日付のある「寛斎百絶」（『寛斎漫稿』所収）なる文章によれば、寛斎は当初明代古文辞学派の詩人に「刻意」したが、やがてその「千篇一格」として陳腐なるに飽き足らぬものを感じ、護園古文辞学の「格を破り」、初め明末性靈派の詩風に学び、次に白居易、晩唐の杜牧・李商隱に親しみ、ついに宋詩風を事とするに至ったものである。このように最初古文辞学の詩風を学んだ詩人が、やがてそれより脱皮して宋詩風を範とするに至るという経路は、古文辞学の退潮する一八世紀末以降に詩人の生涯を送った者にある程度共通するものととくで、例えば豊後日田の広瀬淡窓の詩歴など正に護園から宋詩風に変貌しているごとくであるが（『淡窓詩話』）、淡窓の場合更に時代が下るせいか、「詩に唐宋明清無し、而して巧拙雅俗有り。巧拙は用意の精粗に因り、雅俗は著眼の高卑に係る」（『淡窓詩話』）といった

言辭を吐いて、詩における超党派性を唱道するに至る。南畝もまた寛斎や淡窓のように護園流の詩に飽き足らぬものを感じ、脱皮せんとした試みが寛政二年の『南畝集』に跡づけられるのではないだろうか。護園擬唐詩がどれほど「千篇一格」であったのかの实例を、南畝若年の詩稿に拾つて示そう。

#### 15 九日遊道観

丹楓揺落菊花黃 縹緲真遊傍石牀  
松下神仙朝上帝 雲中鷄犬響斜陽  
登高更伴茱萸女 滿酌聊当沆瀣漿  
佳節簫歌開宴處 疑隨秦史得廻翔  
〔南畝集〕一・明和八年）

#### 234 九日君節見過得愁字

無辺風雨颯三秋 佳節蕭条負勝遊  
霜露沾衣空把菊 江山滿地懶登樓  
銜杯可但開青眼 落帽翻堪惜黑頭  
薄宦久追同舍侶 非君那得散窮愁  
〔南畝集〕一・明和九年）

#### 849 九日新晴集木子莊巢松館

三秋風雨属新晴 九日交歡接旧盟  
松下青苔塵自絶 籬辺黄菊客相迎  
窮愁豈為登高散 雄賦須因落帽成  
吾輩元耽佳句甚 何人擲地作金声

1012 重陽夜感懷

終日驅馳吏事勞 归来風露滿蓬蒿

懶揮彩筆酬佳節 強把黄花泛濁醪

細雨窓前難辨色 浮雲天外隔登高

他年縱有菴山會 落帽何堪見二毛

〔南畝集〕五・天明元年

九月九日重陽の佳節という同じ情況下にあるということやこういう佳節での詩賦は一種の儀礼であるから同趣向であって当然であるということをお案した上でもなお、これらは措辞の点、典故の点で一致する部分が多く、陳腐との誇りは免れがたい。四首目第三句で南畝自身が述べる「彩筆を揮ひて佳節に酬るるに懶し」とは単なる謙辞とのみは受けとりがたく、例年同趣向の詩ばかりを賦すことへの不満の言とも読める。典故について言えば、「把菊」あるいは「把黄花」、「籬辺東菊」と見えるのはいずれも陶淵明の故事であるし、「登高」「茱萸」というのは『蒙求』下巻の「桓景登高」にも見える重陽の風習を指す語である。右四首のうち三首に見える「落帽」とは、晋の孟嘉の故事をふまえ、四首目にある「菴山會」とはその孟嘉が帽子を吹き飛ばされて、恥をかくどころかかえって文名をあげたその場所である。かく、千篇一律とも言ってよい詩を制作して飽き足らぬものを感じぬようではその人はすでに詩人であることを自ら放棄するようなものである。

第四の理由は、すでに随所に述べたように山本北山や江湖

詩社を中心とする江戸詩壇における宋詩唱道の氣運に南畝も与したと考えるものである。しかしながら少しく注意を要するのは、寛政二年の段階では南畝と北山、南畝と江湖詩社の面々との直接的な交渉は開けていなかったということである。北山や寛斎詩仏と南畝が本格的に交ったのは、文化年間のことと属する。例えば、『南畝集』十六（文化四年）に「大窪行天民に過ぎる」と題する詩が見え、同書文化五年の稿には「六月十六日、寛斎河先生世寧六十の初度を寿ぐ」という詩が見えるが、これらは南畝と両者との交遊を知らせる最も早い時期のものである。このことより、江湖詩社からの影響によって南畝が軽々しく流行に投じたという見方を打ち出すのはやや早急であると知れる。前節で見た白氏との唱和詩が、白居易の詩の深甚なる理解の上に成っていたことによっても単純なる影響説は斥けられるべきであろう。が、しかし、南畝の寛政二年の試みが、天明寛政の交のそれまでの『唐詩選』的な盛唐詩の排他的な推重に代って、中晚唐詩や宋詩を持ち上げるという大きな文芸思潮の中に位置づけられることは否定しようもない。流行に投じて消え去った凡百の詩人と南畝の姿勢との間にはならん選ぶところがないかのごとくである。南畝をそうした流れに埋没させてしまわぬためには、われわれは南畝の白詩との唱和の主体的動機に、内的必然性に想いを致さなくてはならぬ。それはまた、どうして南畝の唐土の詩人との和詩が寛政二年庚戌の詩稿に集中しなくてはならなかったのかを解き明す鍵を捜すことでもある。

第五の理由は、かく南畝の内面にわけいることで求められよう

とする。前節で鑑賞を試みた南畝の白氏との和詩はいずれも無常感の底流する内省的な閑適詩であった。日本の詩人の間では菅原道真の昔から白詩は政治性の強い諷諭詩よりも作者の内面を垣間見させる閑適・感傷詩のほうがこのまれてきた。菅家文集『菅家後集』に直接的な政治批判の作品群が見い出せぬことにもそのことは顕著である。南畝が『白氏文集』に収める数ある詩篇の中でも、前節で見たような閑適詩を選びとって和した理由をそうしたあからさまな政治批判を詩に盛りこむことを厭う日本人の心性に縁がなくはないだろう。が、それは一般論であって、南畝個人の心情に即していえば、天明寛政の交に南畝が見舞われた肉親知友の相繼ぐ死没と処罰とこそが想起されるべきなのである。

天明七年 六月松平定信老中首席となり、七月文武奨励令を出す。八月山手白人病没。十二月上山宗次郎斬罪。この年をもって狂歌・戯作と絶縁。

天明八年 九月父正智没。十一月山賀邸没。長姉の夫野村新平没。

寛政元年 平秩東作没。恋川春町没。

寛政二年 四月石井仲車客死。宿屋飯盛江戸払。近辺黒人没。

柄井川柳没。

寛政三年 山東京伝手鎖五十日の刑。

右の年譜を見て一目瞭然であるように天明末年から寛政初年にかけては南畝周辺の人物が矢継ぎ早に南畝と幽明境を異にしている。そして寛政の肅正政治による憂目を被った人物の中、土山宗次郎・平秩東作・山東京伝らは南畝と因縁浅からぬ人たちである。

こうした一連の「死」が南畝の心に暗い影を投げかけずにはおかまい。その結果として、かつての悲憤忼慨・高華雄渾と評しうるような『唐詩選』所収の盛唐詩のごとき作風をもって、おのが青春を謳歌することとき詩を詠み続けることに違和感をいだくに至ったのだろう。そして護國擬唐詩に代って、日常的な身辺雑事を丹念に詠むことをその特徴とする白居易や宋人の詩風に、傷心の南畝は意に叶うものを見い出したのであろう。つまり、寛政二年庚戌の南畝の試行は、張りつめた青春の気分を盛りこむに適した護國擬唐詩には収めがたい、うちひしがれた心情を注ぐべき、新たな抒情の器を探し求めるものであったのである。

さらに言えば、前節に引いた南畝の和白詩制作はより直接的には前年寛政元年の平秩東作の死が心情契機となっていると考えられる。南畝にとって東作は二十三歳年長の知己であり、十五歳の時に初めて見知って以来常に最高の理解者であった。

南畝は狂詩いたりて名人也。むかしも祇園興一狂詩も上手なりけるよし、井上蘭臺なども、一時興に乗じて作られたる詩若干首あり、されども南畝は狂詩専門といふべし。惜らくは詩名是に蔽はれて知らぬ人多し。詩才も比類少き上手なり。

右『華野名談』（文政七年版）の一節を南畝は知己の言として読んだであろう。そして自分の詩才を評価してくれた東作が死んだ翌年、南畝は亡き年長の友を悼む意をこめて、白居易の「与諸客携酒尋去年梅花有感」と「同友人尋澗花」との和詩を作ったのではないか。なぜそのようなことが言えるのか。『巴人集』の中に次のような悼詩が見えるからである。

昔見「四方志」 今婦「長夜台」

天無遺一老 文自患多才

笑傲人間世 飄零石上苔

回思三十歲 花月數含盃

東作の死に際して南畝の腦裏をよぎったのは、三十年余という交遊の間、しばしば同席したであろう看花看月の宴の情景であつたのである。南畝が寛政二年になした和白詩は、詠物詩二首を除く他二首はいずれも看花の宴を背景にしての閑適詩であつた。そして前者「与諸客携酒尋去年梅花有感」の最終聯「樽前の百事皆旧に依るも 点検すれば薛秀才無し」の後に、南畝が感していた（「南畝文庫藏書目録」三十冊から成る和刻本『白氏文集』（那波道圓の後序を付するもので「書坊林和泉揀板行 松栢堂 明曆三年・仲秋吉日」と奥書きのあるもの、今早大図書館蔵本によって確認した）では「去年與薛景文同賞今年長逝」という註記が附されている。この註記は素姓を質せば、南宋紹興刊本に見られる白氏の自註であり、なるほど同じ巻二十には註の内容を裏づける「和薛秀才尋梅花同飲見贈」という題の詩が見える。したがってこの白詩は明らかに去春、看梅の行をともにした薛秀才を喪つた哀しみを底に湛えている。南畝の慧眼は寛政二年の春まだ浅い日に、大部な『白氏文集』の中に右の七律一篇を、あるいはその末に附された白氏自註を射止めた。そしてその詩に和すること、白氏の哀しみを、もっとも信頼すべき友であつた平秩東作を前年に喪つたおのれの哀しみとしてゐるのである。南畝にとつての和白詩制作はかく知友の死に一掬の涙を濺がんとする極めて個人的な心情に契機を持つもの

でもあつたのである。

注(1) 『南畝集』二十の「杏園詩集刻成示鱸猶人」に附載された鈴木猶人の「率押芳韻奉答」七律の五・六句。

(2) 岩波書店『大田南畝全集』三・四・五卷所収の『南畝集』の詩題に冠せられた通し番号による。

(3) 他に『南畝集』十六（文化五年）の「白山看梅」の転結句にも「孤山僧に老ゆ林和靖、千樹身を分つ陸放翁」にもこの両者がふまえられている。

(4) 南畝は梅を詠じるのにこのんで何遍の故事を使つてゐる。

「山莊賞早梅得寒字」に「揮毫一に愧つ何郎が賦」（『南畝集』二・安永三年）とあり、「題川伯温凌風養」に「何郎の好韻重ねて聴くに堪えたり 却月凌風一庭を占む」（『南畝集』五・安永九年）と見え、「詠緑萼梅」に「却月凌風昔遊を憶ふ」（『南畝集』七・天明八年）と見える。また『杏園集』所収「凌風館記」にも「夫れ却月凌風とは、五尺の童子も梅を称するを知る。」とある。

(5) 『南畝文庫藏書目録』中には「蒙求」新注三点、古注一点の記載を見る。

(6) 明の胡應麟のこと。元端はその号。その著「詩數」は江戸中後期によく読まれた書だが、その内篇第三に白居易の七言古詩（「長恨歌」の詩体）を評價する言が見える。

(7) 『南郭先生文集』三編卷之一「七言古詩」の末尾に見える。

(8) 例えば『革命紀行』享和元年三月一日の条には「定家卿の、駒なつ岩城の山とよませ給ひしは、この薩埵峠の事なりとぞ。南郭翁が美薬館の壁に、この処より富士をみるかたをゑがきて、東海道の色これに過たるはあらじとつねにいへるよし、香山上人のこと

のはまで思ひ出つゝ、興よりおりてかちよりゆく。あまたたびかへりみるに、雲深くして富士をみず。」とある。また『南畝集』二・安永二年の詩稿には「赤羽橋を過ぎて南郭先生を懐ふ」と題する七絶も見える。

- (9) 『唐才子伝』巻六、『詩人玉屑』巻十六、『冷齋夜話』巻之一に同内容の記述が見える。

- (10) 白木豊氏の『尾藤二洲伝』(昭和五四年)や大島英夫氏の『字白論争について』(近世研究と評論 第二十五号・昭和五十八年)を参照。

- (11) 西野貞治氏「蘇東坡詩の源流について——とくに白樂天詩との關

係をめぐって——」(『日本中國學會報』第十六集・一九六四年)を参照。また『詩人玉屑』巻十六にも「東坡似樂天」という項があり、東坡の白氏への親愛の様子を記している。

- (12) 中国詩文選 17『白居易』(昭和五十二年十二月 筑摩書房)。殊に「和答詩十首とその序」、「思婦樂の詩に和す」、「四皓廟の詩に答える」の章を見られたい。

- (13) 『華野茗談』の冒頭に南畝がかぶせた寛政七年乙卯孟夏の年記をもつ「題華野談首」には「予十四五時、翁見予千賀郎先生之坐。以爲可與共談也。親炙三十年、恍如三夢」とある。

## 新刊紹介

徳田武編注

『野村篁園・館柳湾』(江戸詩人選集)

永井荷風が、「葦齋漫筆」や「遷東綺譚」の「作後贅言」で「愛誦措く能はざる」詩の作り手とした館柳湾。神田喜一郎氏が『日本における中国文学Ⅰ』で「江戸時代に出た最大の填詞作家」と評価した野村篁園。この二人の漢詩作品のうち、代表的なものを抜粋、綿密な語注と通釈を付し、巻末に、詩人のプロフィール紹介を兼ねた解説と略年譜を加えた構成を本書は持つ。

一口に漢詩の注釈といっても、容易な業ではない。まず詩人が目を通していたと覚しい膨大な漢籍を読み解く力量を要求される。ただに詩中に使われている語彙を過去の典籍に見出だすのみでは済まされぬ。被注釈詩と同じ文脈で使われているものを用例として引かなくてはならない。本書の語注に引用される中国詩人の作例はことごとく、その条件を満たす。また日本の漢詩に注釈を施す場合、先行する中国の詩ばかりではなく、わが国の先輩詩人の作にも目配りすべきであるが、その点についての配慮も本書では随所に窺われる。また詩人の生

きた時代や詩の賦された状況を復元するための考証が要求されることは勿論だが、ここにも入念な注意が払われている。江戸漢詩の注釈を最も困難にしているのは、中国の杜甫や李白のように先人による注釈が備わらぬことであるが、編注者は臆することなく、この前人未踏の領域に挑み、現今において望うる最高水準の成果をわたくしたちにもたらし下さった。その意気たるや、壮なるかな。

(一九九〇・一〇 岩波書店 A5判 三八〇頁 三五〇〇円) 〔池澤一郎〕